

〈研究ノート〉

アルゼンチンにおけるペンテコステ派の拡大

渡 部 奈 々

I はじめに

近年世界中で見られた宗教復興現象により、「近代化の進展とともに宗教は衰退する」という世俗化パラダイムが誤った予言であったと認識されるようになってから久しい。そうした宗教復興現象の一つにペンテコステ運動があげられる。*World Christian Encyclopedia*によると、2000年の時点でキリスト教徒は世界人口の32.3%を占め、20世紀初頭からわずかな下降を示すにすぎない。しかしキリスト教派別にその内訳を見ると、プロテスタント諸教会、聖公会、オーソドックス諸教会がいずれも減少しているのに対し、20世紀初頭に全世界人口の0.1% (98万人) にすぎなかったペンテコステ派はカリスマ刷新運動を通してカトリック教会にまで拡大し¹⁾、100年で8.7% (5億2千万人) を占めるに至った。カトリック大陸といわれているラテンアメリカにおいては、大陸総人口の27.2%にあたる約1億4千万人がペンテコステ派信徒とペンテコスタリズムを实践するカトリック・カリスマ信徒である (Barrett et al. 2001: 14)。

ラテンアメリカのペンテコステ研究は、プロテスタント教会主流派からカルトとして扱われていたペンテコステ派が、地方から都市に流入した多くの貧困層を取り込み一大勢力となった1960年代後半のブラジルとチリにおいて始まった。デビネーとウィレムスに代表される、その時代の数少ないペンテコステ研究者は、体験重視、禁欲主義、聖俗分離からくる政治的

無関心といったペンテコステ派の特徴が、近代化の波に吞まれ身の置きどころを失った貧困層の心をつかんだと主張し、それが今日まで通説として語られている。

アルゼンチンのペンテコステ研究が始まったのは、1980年代のペンテコステ運動を受けてのことであった。1970年代に48万人であったペンテコステ派／カトリック・カリスマ派は、1980年代を通して拡大を続け、1990年代半ばには722万人となった。この運動は、アルゼンチン・リバイバルとして世界中のキリスト教聖職者や信徒から注目を集め、アルゼンチン人研究者の探究心を刺激し (Míguez 1998: 24-25)、それが今日のペンテコステ研究の源流となったのである。2000年現在、アルゼンチンのプロテスタント人口は7%であり、チリやブラジルのそれに比べて比率は低い (チリ25%、ブラジル16%) が、実際には、アルゼンチン国民の約22%である840万人 (内訳はペンテコステ派20%、カトリック・カリスマ派55%、地元で成立した教派25%) がペンテコスタリズムに帰依し、その礼拝スタイルを実践しているといわれている (Barrett et al. 2001: 72)。

本稿ではまず、ペンテコステ運動の歴史的起源に触れ、ペンテコスタリズムの排除と復権の過程を振り返る。次に、主要な先行研究であるウィレムスとデピネーの研究を取り上げ、通説がどのように導かれたのかをみていく。また、アルゼンチンのペンテコステ現象を扱った研究を概観しつつ、民政移管の成った1983年以降にみられたペンテコステ派教会の急速な成長を、大衆伝道者と呼ばれる中間層や貧困層を対象に宣教したカリスマ指導者の役割と、キリスト教会構造の変化といえるペンテコステ化²⁾ 現象から考察する。

II 原始キリスト教時代から20世紀のペンテコステ運動まで

新約聖書の「使徒言行録」でも随所に見られるように、原始キリスト教時代には、異言、預言、病気をいやす力等は、たとえそれが人を通して行われたものであっても、聖霊の働きとして捉えられていた。本稿では、島

蘭進（1992）や手束正昭（1989）にしたがって、聖霊による超自然的な癒しを「いやし」と表記し、医療行為などによる治癒・治療と区別する³⁾。ヨーロッパ中世は、人々の信仰や秩序が社会全体を支配する教会の権威によって強要されていた時代であった。キリスト教会は救済の唯一の手段として自らの正当性を主張し、呪術や俗信などを排除しようとしたが、さまざまな信仰の多くの側面が混在していた人々の生活から呪術を排除することは不可能であった。その後ピューリタリズムの興隆とともに、奇跡やいやしといった聖霊の働きは呪術的なものとして、徹底的に排除されるに至った。神の完全なる超越性を主張するピューリタリズムは、この世に内在する神の力（つまりは聖霊の力）への信仰を否定したが（ウィルソン1979: 30-33）、聖霊の力への信仰は呪術とあいまって民衆信仰の深部に生き続け、プロテスタント教会内においても完全に消滅することはなかった。聖霊信仰は17世紀末のドイツで起こった敬虔派の霊的覚醒運動によって再び強調されるようになり、18世紀イギリスのメソジスト運動、19世紀米国のリバイバル運動とホーリネス運動、そして20世紀初頭のペンテコステ運動へと継承されたのである（尾形2000）。

ペンテコステ運動の100年あまりの歴史を理解するにあたって、ワグナーはそれを三つの時期に分け、それぞれ「第一の波」、「第二の波」、「第三の波」と呼んでいる⁴⁾（ワグナー1991: 3-4）。第一の波は、20世紀初頭に米国で起こり、短期間のうちに全世界へと広がったペンテコステ運動を指している。その特徴は、聖霊のバプテスマ⁵⁾と呼ばれる奇跡の業で、異言を語り、病をいやし、悪霊を追い出すような働きであった。それゆえこの運動は、目に見える聖霊の働きを理解する神学的枠組みを持たなかった伝統的プロテスタント教派からエホバの証人やモルモン教と同様に異端とみなされていたのである。

第二の波が、20世紀半ばに見られたカリスマ運動であり、1960年カリフォルニア州の聖公会司祭ベネットが教会会衆の前で自らが異言を語る体験を持ったことを告白した日が起源とされる。この運動はルター派、長老派、

メソナイト派、バプテスト派、メソジスト派など多くの教派に広まり、1967年にはカトリック教会へも波及した。そして、1980年代初頭から米国の福音派を中心に拡大を続けているのが第三の波（ネオ・カリスマ運動）である。第三の波の特徴は、異言が聖霊のバプテスマを受けたことの証明であるかどうかについての見解にみられる。第一、第二の波では異言が聖霊のバプテスマの唯一の証であるとしたが、第三の波では異言をことさら強調せず、むしろ病のいやしや悪霊の追い出しが重要とされている。アルゼンチンにおいては、第二の波と第三の波が明確に分かれておらず、1980年代のアルゼンチン・リバイバルは福音派によってではなく、大衆伝道者を中心に展開された。この点については、Vでみていく。

Ⅲ 先行研究

1 初期のペンテコステ研究

ラテンアメリカのペンテコステ運動に関する研究は、1960年代、ウィレムスとデピネーにより始められた。本節では、ペンテコステ派に関する通説のよりどころとなり、その後のペンテコステ研究に多大な影響を与えた彼らの研究を概観する。

ウィレムスはブラジルとチリにおける調査をもとに、初めてペンテコステ派信徒の生活を紹介した人物である。第二次世界大戦後、多くのラテンアメリカ諸国では工業化の発展とともに、農村から都市への人口流入が増大し、多くの人々がスラムに定住するようになった。規範の弛緩した都市環境においては農村での習慣や常識が通用せず、都市流入に伴う親戚や拡大家族の分断・縮小は物質的・精神的サポートの減少を意味した。このような状況において、精神的に行き場のない彼らに帰属する場を与えたのがペンテコステ派教会であった。神学や教義の正統性よりも、個人的な救いの証しや体験を重んじ、民衆カトリックの要素（奇跡やいやし）をうまく取り入れたペンテコスタリズムは無学な貧困層の宗教であるとウィレムスは述べている。また、異言などに代表される聖霊の賜物は聖職者や信徒かを

問わず与えられるものであり、それを受けることによって世俗社会の最下層に位置する人々が自信を取り戻すことができると論じた (Willems 1967: 134-140)。

他方、チリで調査を行ったデピネーは、ウィレムス同様にペンテコスタリズムを貧者の宗教としたが、他の点では独自の論を展開している。デピネーはラテンアメリカのカウディージョ文化を民主主義に相反する権威主義と捉え、ペンテコステ派教会内にもその文化が脈々と受け継がれていると論じた。近代化の進展に伴い、地主と小作農の保護・従属関係を失った人々は、保護者となる新たな父親像を求めてペンテコステ派教会に向かったというのである。デピネーは、教会において牧師と信徒がそれぞれ保護する者(地主)とされる者(小作農)の役割を担うことにより、世俗社会では失われた古い伝統的権威を復活させたことが、ペンテコステ派教会の急成長に寄与したと結論づけた (d' Epinay 1969: 78-84)。

2 アルゼンチン国内におけるペンテコステ研究

アルゼンチンにおいて、ペンテコスタリズムが社会科学や歴史学の研究対象とされるようになったのは1983年以降のことであった。民主化による宗教の自由、つまりは伝道活動の自由を享受し、急速に拡大を続けていたペンテコステ運動は研究者の関心を集め、国内におけるペンテコステ研究開始の動因となった。先行研究の検討から始めた研究者は、アルゼンチンに関する研究が存在しないばかりか、ラテンアメリカのペンテコステ研究の多くがウィレムスやデピネーの論をそのまま適用していることに失望し、国内におけるペンテコステ調査を開始した。そして、研究数の増加とともに、1980年代後半、ペンテコステ研究は宗教社会学の一分野として認められるようになったのである (Frigerio 1994: 10; Míguez 1998: 24-26)。

ソネイラは、首都ブエノスアイレスのペンテコステ派教会の信徒35名を対象にしたインタビュー調査により、ペンテコステ信徒の特徴を明らかにしようと試みている。そして、調査対象者の大半が首都または大ブエノス

アイレス圏⁶⁾出身者であるという結果から、都市に流入した国内外移民が失った伝統習慣や保護者の代替をペンテコステ派教会に求めたというウィレムスやデピネーの主張がこのケースに当てはまらないとした。また、元カトリック信者であった29名が、ペンテコステ改宗の主な理由としてあげたのは、離婚、死別、病気、失業等の問題であり、この点においてもウィレムスやデピネーの主張と大きな違いがみられる (Soneira 1994)。

やはりミクロの視点から調査を行ったミゲスは、ペンテコステ派教会が人々に与える効果 (禁欲によるアルコール依存からの回復や家計の安定、自尊心の芽生え等) を改宗の要因として強調する学説⁷⁾に異議を唱え、改宗者の信仰上の動機に着目した。そして、人々は超自然的な問いに対する新しい答えを見出そうとし、神とつながる方法を求め、その要求を最も満たしてくれるグループに改宗すると結論づけた (Míguez 1999)。

ペンテコステ拡大現象を他のプロテスタント諸教派との関連から考察したのが、ヴィナルチュイクとセマンである。アルゼンチンのエキュメニカル運動は元来プロテスタント教会の一致を目指したものであったが、諸教派の意見の衝突が運動を衰退させ、ひいては運動に関わっていた伝統的プロテスタント諸教派の弱体化を招いた。伝統的プロテスタント教会が自らの教会再生のためにペンテコスタリズムを取り入れたことと、ペンテコステ派教会が他のプロテスタント諸教派との違い (異言等の目に見える形での聖霊信仰) をことさら強調するのをやめ、穏健化したことがペンテコステ拡大につながったと論じている (Wynarczyk y Semán 1994)。一方マクロな視点からペンテコステ運動を論じたのがマロスティカであり、ペンテコステ運動を新しい社会運動の一つととらえ分析を試みている (Marostica 1994)。

アルゼンチン国内研究が進むにつれ、1980年代のペンテコステ運動の実態が明らかになると同時に、その拡大プロセスにおける独自性が指摘されるようになった (Marostica 1999; Wagner and Deiros 1998)。その独自性とは、ペンテコステ運動における大衆伝道者の役割であり、またプロテスタ

ント教会のペンテコステ化現象である。この点を論じる前に、ペンテコステ派拡大の背景となったアルゼンチンの民主化について触れる。

IV ペンテコステ派拡大の背景：民主化による宗教の自由

1950年代以降のアルゼンチンでは、ブラジルやチリで起きたようなペンテコステ派の拡大現象はみられなかった⁸⁾。それは国家権力と緊密な関係を維持していたカトリック教会からの圧力⁹⁾によるものと考えられる。大ブエノスアイレス圏に流入した農村人口がそれまでの習慣や文化を失い、アイデンティティの危機に直面したのは事実であるが、貧困に苦しむ人々を支援したのは社会司牧の理念を持った若いカトリック司祭や修道女達であった¹⁰⁾。その後の軍政下における大規模な人権侵害、そして経済政策の失敗に対する世論の批判が強まる中、1982年アルゼンチン軍政はマルビーナス戦争に突入したが、敗戦により軍事政権は崩壊し、民政移管が行われたのである。

民政移管により政教分離が進み、個人の権利を重視する風潮が生まれ、個人の宗教選択の自由が拡大した。カトリック以外の宗教を信仰することから生じる社会的デメリット（差別や排除）が激減したため、自分の好みで宗教を選択する人々も増え、カトリック教会で幼児洗礼を受けた多くの人が、ペンテコステ派教会をはじめとする他教派、他宗教の信徒となった（Míguez 1998: 26-27）。個人の宗教の自由もさることながら、カトリック教会以外の宗教団体活動の自由が拡大されたことが、アルゼンチンにおける大規模なペンテコステ運動を可能にしたといえる。例えばラジオ放送の許可は、多くのペンテコステ派教会に放送伝道の機会を与えた。ラジオと言っても、その大半は放送範囲が半径2、3キロほどのFMラジオであったが、近隣住民に教会の存在や大衆伝道集会の開催を知らせるには十分効果的であった。そのほかにも、ペンテコステ系の全国紙 *El Puente*（橋）が刊行され、大衆伝道集会が全国各地で開催されるなど、1980年代後半から1990年代はペンテコステ派躍動の時代であった。しかし同時代のアルゼン

チン経済は混迷の度を増し、1980年代の累積債務問題とハイパーインフレ、そして1990年代の新自由主義経済政策による市場競争の激化が人々の生活を圧迫し、失業と貧困の増大へとつながった。アルゼンチンにおいてペンテコステ派が拡大した背景には、民主化という政治的変容のほかに経済的要因があったと考えられるが、紙幅に制限があるため、本稿での考察は控える。

V 大衆伝道者の新しいメッセージ

アルゼンチンのペンテコステ運動の立役者といわれるカルロス・アナコンディアが活動したのも、まさにペンテコステ派の興隆期であった。1980年代、90年代の大きな流れをつくった彼の伝道に焦点を当てながら、人々を捉えたものが何であったのかを検証する。

1979年、ブエノスアイレス州サンフストで開催されたキリスト教伝道集会で回心した彼は、その2年後に大ブエノスアイレス圏の貧困地区において大衆伝道を開始した。彼の伝道集会を通して1985年までに約29万人が改宗し、アナコンディアの名前がアルゼンチン内外に知れ渡るようになると、ラテンアメリカ諸国や米国はもとより、ヨーロッパからロシア、日本にいたる各地での伝道集会に招かれた (Burgess and Van Der Maas 2002: 25)。彼の伝道の特徴としてあげられるのは、伝道集会をきわめて長い期間にわたって開催することである。アルゼンチンにおけるペンテコステ伝道集会の開催期間は通常1週間ほどであるが、アナコンディアの伝道集会は一つの場所で2ヶ月間にわたって行われるのが普通であり、最長の例は8ヶ月間続いた。長期にわたる伝道集会では、いやしや解放を体験した参加者の口コミがさらにその家族や隣人の参加を誘い、日を追うごとに参加者数が増加していく現象がみられた。集会で行われる悪霊祓いやいやしの業は、それまでのアルゼンチン国内のペンテコステ派教会でもみられない独特のものであった。彼が悪霊 (エスピリティスモやニューエイジ等の他宗教を含む) に出て行けと命じると、多くの人が地面に倒れテントに運ば

れた (Annacondia 1998: 58-69; Marostica 1999: 155-158)。

彼が人々をひきつけた要因として、それまでになかった大規模な伝道集会といやしの実践があげられる。民主化以前は伝道集会の開催自体が困難であり、開催したとしても大都市に限定されていたため、都市周縁に住む貧困層が参加できるものではなかった。しかし、アナコンディアの集会は大ブエノスアイレス圏に点在するビジャと呼ばれる貧困地区や首都から遠く離れた町で行われたため、貧困層の参加を容易にしたのである。そして伝道集会の開催期間が終わると、集会参加者が近隣のペンテコステ派教会に通いはじめるケースが多くみられた (Deiros 1998: 34)。ペンテコステ派信徒の実態に関するソネイラの研究によると、インタビューを受けた35名中3分の1の信徒は、伝道集会がきっかけでペンテコステ派教会に通うようになったと答えている (Soneira 1994: 55)。

大ブエノスアイレス圏における大衆セクターの信仰心を研究したセマンは、多くの人々にとって教会などの宗教資源は他の社会資源と同列に存在し、宗教は現実逃避の手段ではないと述べており、ペンテコスタリズムが拡大した理由を二つあげている。一つは、聖霊のいやしや悪霊の存在を強調するペンテコスタリズムが大衆セクターに既存の信仰文化を損なうものではなく、人々がペンテコスタリズムを信仰する上での障害が少なかった点である。さらに、大半の人が名目上のカトリック信者であったため、キリスト教を土台とするペンテコスタリズムは他宗教に比べて、受け入れられやすかったといえる (Semán 2000: 170-178)。

VI プロテスタント教会のペンテコステ化

いやしを求めてやって来る人々でペンテコステ派教会が賑わう一方、既存のプロテスタント教派では信徒の教会離れが進んでいた。プロテスタント教会における信徒数減少は、牧師給与の支給や教会運営へのダメージを意味するものであった。しかし、全てのプロテスタント教会がこの現象を座視していたわけではなく、アナコンディアの伝道集会に参加し、そこで

行われていたいやしや悪霊祓いの業を自らの教会内で実践した牧師達もいた。それらの教会では信徒の教会離れがおさまり、このことがプロテスタント教会のペンテコステ化を促進した。つまり、教会でペンテコスタリズムを実践すれば、信徒は他のペンテコステ派教会に移ることはないばかりか、信徒数が増加していくという体験をしたのである。

ペンテコステ派や教会に対するこだわりが少なかったアナコンディアは、プロテスタント諸教会を伝道集会に招いたが、彼らにペンテコスタリズムを強要することはなかった。それゆえ、伝統的プロテスタント教会は自らの組織体制を変えることなく、柔軟にペンテコスタリズムを取り入れ、実践することができたといえる。その結果として、ペンテコスタル・バプテストやペンテコスタル・メソジストといった伝統的教会のペンテコステ化がブエノスアイレス州内の各地で進んだ。また同時期にペンテコステ派教会の穏健化が進み¹¹⁾、他のラテンアメリカ諸国にはみられない、礼拝スタイルや教義といった点でのプロテスタント諸派の相似化現象が起きている (Deiros 1998: 34-36)。そして Iglesia Evangélica (厳密には福音派教会の意味だが、アルゼンチンでは多くの場合プロテスタント教会を指す) という言葉は「程度の差こそあれペンテコステ派の要素を持つプロテスタント」という意味合いを持つようになったのである。1960年代に盛り上がりを見せたプロテスタント諸教派によるエキュメニカル運動が停滞して久しい今日、アルゼンチンにおける伝統的プロテスタント教会のペンテコステ化と、それに伴うプロテスタント諸教派の相似化はたいへん興味深い現象であり、今後のエキュメニカル論を研究する上でも、我々に有用な視点を提供すると考えられる。

ブエノスアイレスの在亜日本人キリスト教会も、伝統的プロテスタント教会がペンテコステ化したケースの一つである。在亜日本人キリスト教会は首都ブエノスアイレスのフローレス地区に位置し、日系人とアルゼンチン人合わせて約150名が集っている。この教会の起源は、日本から一つの家族がブエノスアイレスにやって来た1931年にさかのぼる。大阪商船会社の

アルゼンチン支社に転勤となった岡島元七郎とその妻倭子は熱心なプロテスタント信徒であったが、その頃、ブエノスアイレス市内にプロテスタント教会は少なく、まして日本語で礼拝をする教会は皆無であった。そのような状況の中、岡島夫妻は自宅で日曜学校を始め、倭子は病気や不遇な立場にある日系人を訪問し、慰め、共に祈った。岡島家の集會に集まる人数は次第に増え、1933年にYMCAの一室を借りての聖書研究会へと発展した。1939年、岡島夫妻が日本へ帰国した後、日本から牧師を招聘し、これが日本人キリスト教会の母体となったのである（在亜日本人キリスト教会1993）。2000年までに数名の日本人牧師が派遣され、この教会での務めに従事した。彼らは皆ペンテコステ派を容認しない福音派や改革派出身であったため、ペンテコステに対する理解が乏しく、周囲で起きているペンテコステ運動にも無関心であった。しかし実際には、ペンテコステ運動は日系人キリスト者にまで及んでいたのであった。1980年以降アナコンディアの伝道集會が大ブエノスアイレス圏各地で開催されると、信徒の中には牧師に黙って集會に参加し、アナコンディアなどの世界的なペンテコステ伝道師の著書を日本から取り寄せては読む者もいた。

この頃になると、教会信徒の世代交代が進み、教会の主要構成メンバーも日本語を母語とする日系一世からスペイン語を母語とする日系二世、三世になり、言葉のハンデをもつ日本人牧師では十分な司牧ができない状況となった¹²⁾。2000年日本人牧師が退任し帰国すると、アルゼンチン生まれで日本語・スペイン語共に堪能な日系二世の牧師が着任した。彼はペンテコスタル・バプテスト教会出身であり、ペンテコスタリズムを実践している牧師であった。新しい牧師の就任後、礼拝スタイルはペンテコステのものを踏襲し、礼拝中にいやしや聖霊を求める祈りが行われるようになったが、日系一世を含む大半の教会員たちはそれらを抵抗なく受け入れたのであった。礼拝中、牧師をはじめ数人の信徒は異言で祈ることもあるが、他のメンバーに強要することもなく、ワグナーの区分に従っていえば、第三の波にみられるペンテコスタル・プロテスタント教会といえる。このように在

亜日本人キリスト教会は、牧師の交代がきっかけとなりペンテコステ化したケースであるが、信徒がすでに教会外でペンテコスタリズムに触れており、その教えを好ましいものとして受け入れていたことが、そのスムーズな移行を可能にしたといえよう。

Ⅶ むすび

世界中で拡大を続けるペンテコスタリズムは、貧困者の宗教とみなされてきた。神学を持たず、異言やいやし、悪霊を強調するペンテコスタリズムは民間信仰やシャーマニズムと変わることなく、高揚感のある礼拝が無学な貧困層の心をつかんだというのが通説となっているが、1983年以降のアルゼンチンにおけるペンテコステ運動拡大の背景には、いくつか別の要因があり、それらが運動拡大の独自性に結びついていることがわかった。

民主化という政治体制の根本的変化は、多くのペンテコステ改宗者が生まれる背景となった。民主化は、非カトリック団体の宗教活動の自由を拡大し、ペンテコステ派の活発な伝道活動を可能にし、その後続く大規模なペンテコステ運動の礎を築いたといえる。大衆伝道者アナコンディアは、いやしと悪霊祓いを主とした伝道集会を大々的に行い、同質の信仰文化を持つ大衆セクターをひきつけることに成功した。また、教会教派にこだわらない彼の伝道集会は、伝統的プロテスタント教会のペンテコステ化という現象を引き起こし、それまで呪術やシャーマニズムとみなされてきた聖霊の「いやし」がペンテコステ化したプロテスタント教会やカトリック教会で正統なものとして認知され、実践されるようになったのである。従来のカトリック／プロテスタントの枠を越え、両者のいずれにも浸透するペンテコスタリズムは、アルゼンチンのみならず世界のキリスト教地図を塗り替える可能性を秘めており、ペンテコスタリズムの世界的拡大を考える上で、以上述べてきたアルゼンチンのケースは示唆に富むものと思われる。

註

- 1) ペンテコスタリズムがカトリック教会に広まったのは1967年以降のことであり、カリスマ刷新運動と呼ばれる。ペンテコスタリズムを实践するカトリック信者はカトリック・カリスマ派として分類され、2000年現在、世界に1億2千万人のカリスマ派信者が存在するといわれている。*World Christian Encyclopedia*ではペンテコステ派／カリスマ派を一つのカテゴリーとして扱っている。
- 2) カトリック教会や伝統のプロテスタント教会またはその信徒がペンテコスタリズムの主要素である異言、預言、いやし、悪霊祓い等を採用し、そこに聖霊の働きを認めること。英語の“pentecostalization”“pentecostalized”を本稿では「ペンテコステ化」「ペンテコステ化した」と訳した。礼拝スタイルもペンテコステ派教会のそれに似たものとなり、恍惚状態での賛美や踊り、異言やその解釈の表明、預言を語ること、いやしの祈り等が自由な形で行われる。
- 3) アルゼンチンのペンテコステ派教会では、本来あるべき健全な形への回復を意味するいやし (sanidad) が肉体的・精神的なものにとどまらず、家庭経済のいやし、人間関係のいやし、としても理解されている。
- 4) ワグナーが「聖霊の第三の波」を提唱した翌年に、手束は20世紀初頭から今日に至るペンテコステ運動を包括して「キリスト教の第三の波」と称しているが、一般的にはワグナーの区分が受け入れられている。
- 5) 「エルサレムを離れず、父の約束されたものを待ちなさい。ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を受けられるからである」と昇天前のイエスが弟子達に命じたように、五旬祭 (ペンテコステ) の日に聖霊を受けた弟子達は異言 (習得したことのない外国語または霊的な言語) で語りだした (『聖書新共同訳』使徒言行録1: 5, 2: 1-4)。これがペンテコステの起源であり、ここから聖霊のバプテスマ (洗礼) という概念が誕生した。一般にキリスト教徒になる儀式が水のバプテスマ (洗礼) であり、聖霊の力を受けることを意味する聖霊のバプテスマと区別される。
- 6) ブエノスアイレス特別区とその周辺に広がる24の partido (市) により形成される首都圏であり、雇用を求めて流入した国内外からの移民の不法居住や貧困の拡大、犯罪率上昇など多くの問題を抱えている。
- 7) マーチンは中南米諸国のケーススタディを参照しながら、ラテンアメリカにおけるペンテコスタリズムの爆発的拡大を紹介し、信徒間の自発的連帯による個人の自尊心回復と、禁欲主義によるアルコール摂取や暴力の減少が、最終的には節約と家庭生活の改善につながると予想した (Martin 1990: 230-232)。アルゼンチンに関しては、1980年代以前のプロスタント教会の趨勢についてわずかに触れられているのみである。
- 8) 1950年以前のアルゼンチンには、ヨーロッパからの移民教会や宣教師教会、

そして1910年に伝播したペンテコステ派教会が存在していたが、社会に対する影響力は微々たるものであった。

- 9) ベロン大統領とカトリック教会の対立が深まった1954年、カトリック教会に代わる支持基盤を求めたベロンはプロテスタント教会や他の宗教グループを支援したが、翌年の失脚以降は非カトリックの規制が再び強化された (So-neira 1996: 244-246; Míguez 1998: 18)。
- 10) 第二バチカン公会議とその後のラテンアメリカ司教協議会総会 (メデジン会議)において、カトリック教会が貧しい人々と共に働き社会正義の実現を目指すことが確認され、多くの聖職者が社会活動に献身した。
- 11) ペンテコステ派教会では、聖霊は望むところに吹きよせ、望んだ人々を用いるという信頼が礼拝の基盤になっているため、礼拝プログラムや順序がなく、異言やその解釈、預言を語ること、あるいは恍惚状態での賛美やダンスなどが礼拝中にとことかまわず行われ、礼拝説教がないこともある。そのような礼拝に秩序を持たせる (具体的には礼拝プログラムの順序づけをするなど) ことや、今まで軽視していた礼拝外での聖書の学びを充実させることをペンテコステ派の穏健化という。秩序があり信徒教育を重んじるペンテコステ化した伝統的教会を好んだペンテコステ派教会信徒らが、ペンテコステ派教会からペンテコステ化したプロテスタント教会へ移る現象がみられ、ペンテコステ派教会の穏健化はその対応策としてとられたものといえる。
- 12) 礼拝は日本語で執り行われ、スペイン語通訳がついていたが、言葉のハンデを持つ日本人牧師ではスペイン語を話す若い信徒へのケアが不十分となり、若い世代が他教会に移るケースも多くみられたという。(在亜日本人キリスト教会において2007年8月に行った60代女性信徒とのインフォーマル・インタビューから)。

参考文献

- ウィルソン、ブライアン。1979。『現代宗教の変容』井門富二夫、中野毅訳、ヨルダン社。
- 尾形守。2000。『リバイバルの源流を辿る』マルコーシュ・パブリケーション。
- 在亜日本人キリスト教会。1993。『在亜日系宣教60周年記念：ただ神の恵みによって』。
- 島蘭進。1992。「民衆的キリスト教と現代—ペンテコステ運動からネオ・ペンテコステ運動へ」(井門富二夫編『多元社会の宗教集団—アメリカの宗教・第2巻』大明堂)、169-191ページ。
- 手束正昭。1989。『続 キリスト教の第三の波—カリスマ運動とは何か』キリスト教新聞社。
- ワグナー、C. ピーター。1991。『聖霊の第三の波』辻潤訳、暁書房。

- Annacondia, Carlos. 1998. "Power Evangelism, Argentine Style," in Wagner, Peter. and Pablo Deiros (eds.), *The Rising Revival* (Ventura: Renew Books), pp. 57-74.
- Barrett, David B. et al. (eds.). 2001. *World Christian Encyclopedia: A Comparative Survey of Churches and Religions in the Modern World* (Oxford: Oxford University Press).
- Burgess, Stanley M. and Eduard M. Van Der Maas (eds.). 2002. *The New International Dictionary of Pentecostal and Charismatic Movements* (Michigan: Zondervan).
- Deiros, Pablo A. 1998. "The Roots and the Fruits of the Argentine Revival," in Wagner, Peter. and Pablo Deiros (eds.), *The Rising Revival* (Ventura: Renew Books), pp. 29-55.
- d' Epinay, Christian Lalive. 1969. *Haven of the Masses: A Study of the Pentecostal Movement in Chile* (London: Lutterworth Press).
- Frigerio, Alejandro. 1994. "Estudios recientes sobre el pentecostalismo en el cono sur: problemas y perspectivas," in Frigerio, Alejandro (comp.) *El Pentecostalismo en la Argentina* (Buenos Aires: Centro Editor de América Latina), pp. 10-28.
- Marostica, Matthew. 1994. "La iglesia evangélica en la Argentina como nuevo movimiento social," *Sociedad y religión* No. 12, pp. 3-16.
- 1999. "The Defeat of Denominational Culture in the Argentine Evangelical Movement," in Smith, Christian. and Joshua Prokopy (eds.) *Latin America Religion in Motion* (London: Routledge), pp. 147-172.
- Martin, David. 1990. *Tongues of Fire: The Explosion of Protestantism in Latin America* (Oxford and Cambridge: Blackwell Publishers).
- Míguez, Daniel. 1998. *Spiritual Bonfire in Argentina: Confronting Current Theories with and Ethnographic Account of Pentecostal Growth in a Buenos Aires Suburb* (Amsterdam: CEDLA).
- 1999. "Exploring the Argentinian Case: Religious Motives in the Growth of Latin American Pentecostalism," in Smith, Christian. and Joshua Prokopy (eds.) *Latin America Religion in Motion* (London: Routledge), pp. 221-234.
- Semán, Pablo. 2000. "El pentecostalismo y la religiosidad de los sectores populares," in Svampa, Maristella (ed.) *Desde abajo: La transformación de las identidades sociales* (Buenos Aires: Universidad Nacional de General Sarmiento, Editorial Biblos), pp. 155-180.
- Soneira, Abelardo Jorge. 1994. "Biografía y religiosidad pentecostal: Una aproxima-

- macion al estudio de las características socio-biográficas del creyente pentecostal," in Frigerio, Alejandro (comp.) *El Pentecostalismo en la Argentina* (Buenos Aires: Centro Editor de América Latina), pp. 44-59.
- Soneira, Abelardo Jorge (ed.). 1996. *Sociología de la religión* (Buenos Aires: Editorial Docencia-Fundación "Hernandarias").
- Wagner, Peter and Pablo Deiros (eds.). 1998. *The Rising Revival* (Ventura: Renew Books).
- Willems, Emilio. 1967. *Followers of the New Faith: Culture Change and the Rise of Protestantism in Brazil and Chile* (Nashville: Vanderbilt University Press).
- Wynarczyk, Hilario y Pablo Semán. 1994. "Campo Evangelico y Pentecostalismo en la Argentina," in Frigerio, Alejandro (comp.) *El Pentecostalismo en la Argentina* (Buenos Aires: Centro Editor de América Latina), pp. 29-43.